

平成 25 年 11 月 25 日

研修状況報告

愛知県立時習館高等学校 教諭 家根谷 直登

□研修校について

- 愛知県三河地区の中核的進学校（豊橋市）。各学年 8 学級定員 320 人
- 文科省 SSH 指定校（6 年目）、科学技術人材育成重点校指定校（全国で 3 校）で SS グローバルとして国際交流に力を入れている。また、SGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）に申請予定で委員会を立ち上げた。
- 進学実績 H25 入試：東京大 10、京都大 9、名古屋大 45 をはじめ難関大 111、医学科 17、国公立大 265（人）

□研修校での担当

- 数学、2 年 8 組副担任、校務分掌は SSH 部、部活動は山岳部、陸上部副顧問。

□研修内容

- <クラス目標>各担任に任せず、学校目標に統一している。一つを強調することで、最も意識させたいことが自然と定着する（生徒も教員もつい口に出してしまうほど）。
- <職員室>配置が学年毎になっていて、学年内では教科毎に若手とベテランが机を横にするという形で、常に生徒や教科指導に関しての情報共有や、学年会・教科会が常時行われている感じを受ける。このように時習館はチームでの指導を強く意識する。
- <1 人に依存しない教科指導>ベテランと若手がペアを組む互見授業システムを実施。また、国数英の授業に関しては 1 クラスに対して 2 人の教員が受け持つ（例えば、国語なら現代文 3 単位 A 先生、古典 3 単位 B 先生）。生徒はより多くの先生から幅広い考え方を学ぶことができ、また、教科指導をチームで行う体制が自然とできあがる。
- <特色ある英語の授業>予習をさせない授業で、いち早く生徒によるコミュニケーション、スピーキング主体の授業を導入し、学校全体に浸透している。
- <進路検討会>7 月。主に東大・京大・名大を目指す生徒と、志望が下がっている生徒の確認を行う。担任から学習態度や生活態度について説明を行い、苦手科目に関して教科担任から状況を説明。夏休みに向けて担任面談や保護者面談をどう行うかを 3 年の学年団で検討。この時期に生徒情報の共有、学年全体での声かけ体制は素晴らしい。
- <時習館高校と福井県の授業>時習館高校ではある程度生徒任せの学習指導であるのに対し、福井県では非常に丁寧に生徒に寄り添った指導をしているように感じる。
（例：数学の授業において時習館では必要と判断したところを解説し、それ以外はしない。福井県は教科書の隅々まで丁寧に解説していく。）突出した才能を育てようとするとき、敢えてすべてを教えないことで生徒の自主性を刺激するなどの工夫と福井県の丁寧さの融合についてを残りの研修期間のテーマの一つとしたい。
- <SS グローバルの活用>参加生徒の英語力や表現力の向上が顕著。海外の高校生と英語で合同研究発表を行うことで、国際社会で生きる自信と素養が身についている。
- <高校に対する保護者の高い関心>授業公開日の保護者の見学者が多く、毎回 100 名程度が来校。学校に対する関心が非常に高い。中にはアンケートを通してこんな授業をして欲しいという要望を出している保護者もいる。アンケート結果では全体的に時習館高校の学習指導に満足している保護者が多く、学校に期待を寄せている。

研修状況報告

静岡県立浜松西高等学校中等部 教諭 西川 潤也

□研修校について

- 併設型中高一貫校：平成 14 年度から中等部を開校。今年度、12 年目
- 中等部各学年 4 学級 160 人、高等部各学年 6 学級 240 人（内 2 学級 80 人が外進生）
 - ・数学で先取り
 - ・部活動は 16 (運動部 12 文化部 4) 生徒数に対して部数が多く今後統廃合予定
 - ・中学の制服や体操服は高校と同じ。昼食は弁当だが牛乳はあり。
 - ・中学生は自転車通学が認められない。
- 進学実績 H25 入試：東京大 6、京都大 2、医学部 8 をはじめ国公立 121 (人)

□研修校での担当

- 英語（中学 2 年、高校 2 年）、教務課、野球部

□研修内容

- ＜中学部対面式＞年度初めに①高校生と中学生、②中学部での新入生歓迎式を実施
- ＜シラバス＞教科毎、学年毎に作られ、中高 6 年間を見通した流れと、今年一年間の予定表と学習内容が掲載されている。生徒はその進捗表を見ながら、予習→授業→復習の学習サイクルを確立していくことができる。
- ＜部の文化＞「きめ細かい指導」を行う中等部の教員と「生徒の自主性」を重んじる高等部の教員の間に、発足当時は指導方針等で摩擦があった。県内中高一貫他校でも、中等部と高等部の教員を混合した会議、連絡会を積極的に開くなどで対応している。
- ＜基礎の徹底＞中等部では高校入試がないために生まれた時間を、基礎の徹底に充てることで、高校で伸びる生徒が増えている。
- ＜スーパートップの指導＞中等部からの生徒には、「スーパートップ」が存在し、難関大学に合格。選抜クラス、少人数教育、習熟度別指導を積極的に実施することで、丁寧な指導が行われ、学力向上につながっている。
- ＜部活動＞硬式テニス、水泳、陸上など中高通して指導ができる、中等部 3 年の後半に部活動を行える利点がある。高校生と一緒に活動する日もある。
- ＜職員数、職員配置＞一般中学に比べ、総授業コマ数が多いため職員数は多い。高校教員：中学教員の比は 2：1。全教員が大職員室に入るため情報の交換が行いやすい。
- ＜高校入試裁量枠＞学校に「裁量枠」が存在。部活動や生徒会活動、学習活動で優秀な成績を収めた生徒を合格とすることができる制度。運動部の活性化につながっている。
- ＜中学部研修旅行＞学年毎のテーマを持って宿泊研修を行う。1 年は富士山麓で、2 年は奈良京都へ 2 泊 3 日で研修旅行として実施。3 年は「アジアを知る」意味でシンガポールへ 4 泊 5 日の研修旅行を行う。事前研修、旅行研修を通して学んだことについてのプレゼンテーションを校内発表会で行っている。

研修状況報告

長野県屋代高等学校 教諭 高野 修一

□研修校について

- 併設型中高一貫校：平成 24 年度から中等部を開校。今年度、2 年目
- 中学校各学年 2 学級 80 人、高校各学年 7 学級 280 人（内 1 学級 40 人が理数科）
 - ・高校、附属中学校ともに 55 分授業を 1 日 6 時間で実施。時間割を A 週と B 週の 2 種類作成し、隔週で実施。前期後期の二学期制
 - ・主要 5 教科で実質先取り。中高 6 年間を 2 年毎に区切り、基礎期、充実期、発展期として指導する予定。高校進学時に内・外進生は混合しない予定
 - ・部活動は中学単独 2（運動部 1 文化部 1）、高校と合同 9（運動部 5、文化部 4）
 - ・中学は制服、高校は私服。中学生の昼食は弁当だが牛乳はあり。
 - ・通学方法の制約は中学生の 2km 以内は自転車禁止のみ。軽井沢から 100 分の例
- 進学実績・H25 入試：京都大 1、他の旧帝大 6 をはじめ国公立 99（人）

□研修校での担当

- 国語、担任なし、広報入試係、部活動は剣道班を指導

□研修内容

- <附属中学校説明会> 6 月と 10 月に近くの市民会館で開催。午前、午後各 1 回 1 時間半程度で実施。6 月は約 800 名、10 月には約 700 名の来場者があった。6 月は学校生活、10 月は入試に関する説明を実施。
- <中高一貫に関する校内研修会> 附属中学からの内進生が高校に上がる 2 年後に向けての対応について、特に、高校から入学してくる外進生との混合に関する対応について検討。こうした研修会を通じて、特に高校の教員側に中高一貫に対する理解が進んでいる。今年度に入り、内進生が高校に入学してからのカリキュラムを、各教科を中心に活発に議論している。
- <受験対策全般> 長野では、県内に予備校があるということで、浪人に対する抵抗感が、勝山高に比べて薄い印象。国公立に対する志向もそれほど強くなく、3 年生の段階ですでに私立大学の受験に絞っている生徒が一定数いる。彼らのほとんどは首都圏にある私立大学を志望。授業科目としても数学や理科はなく、受験で使う英語や国語、社会の勉強に専念できるようにしている。
- <全人教育を重視> たとえば、高 1 から高 2 に上がる際のクラス替えは、文系・理系では分けて、授業はコースごとに分かれて受ける。クラスで行う行事などが重要視されている。過度な受験競争は、高校生にとってよくないという意識の表れか。そのような中、長野県内の公立校で初の中高一貫校となった屋代中高への注目は、新聞報道などを見ても高い。
- <教科会> 教科教員全員で古典文章の品詞分解を行うなど、勝山高とは違った取組み。
- <職員室> 教科ごとに割り振られていて、教科内の連携が取りやすい。教務部と進路指導部だけは別に職員室がある。学年や分掌のことは、教員同士が互いの部屋を行き来して、直接話をしながら連携を取っている。

学力向上センターの今後の方向性への助言について

アドバイザー (株)ナガセ代表取締役社長 永瀬 昭幸氏
常葉大学教授 小松 郁夫氏
立教大学教授 松本 茂氏

(1) 子どもの能力を一層伸ばす「きたえる教育」と学習に遅れを生じない「ていねいな教育」の推進

○短所矯正型より長所伸長型の教育に

- ・各種調査によると、福井県は平均的に引き上げることがうまい。
- ・今後の課題は、能力に応じてどのように伸ばしていくのか。
- ・「短所矯正型」から「長所伸長型」に転換することが必要である。

○全体のベースになる学習観を共有することが重要

- ・どういう子どもに育ってもらいたいのか、どういうビジョンでどういう子どもを育てるのかという「学習観」が必要である。

○モチベーションを上げるには学習の意義を意識づけること

- ・「授業をすること」ではなく、「自分でやらせる」ことが重要で、「なぜ勉強するのか」学習の意義を意識づけることが必要である。
- ・こうした意識の高い児童・生徒には、最近よく言われている「反転授業」（事前に課題を与え、学校ではその復習や応用を行う授業形態）などは十分効果的である。
- ・モチベーションを上げるためには、指導者がほめること、グループのリーダーなどの役割を与えること、地域の人、先輩や同年代の優秀な児童・生徒達と交流させることなどが有効である。

○「授業」から「受業」へ考え方を変える

- ・明治以来の教え込む「授業」から学ぶ側を尊重する「受業」に転換すべきである。

○都道府県の教育が国の教育をリードする役割を

- ・国はどうしても平均的な施策展開になるが、今日の地方分権時代には、都道府県が全国をリードする役割を担うべきで、福井県が全国の都道府

県を引っ張る役目を積極的に担えばよい。人口が少ないことは、好都合である。

○全体を引き上げる

- ・公立学校で習熟度を導入することは難しいが、合宿で目標をもたせること、大学の先進的な事例に触れるなどで、意識の高い児童・生徒を伸ばしながら全体を引き上げる。

(2) ICT機能を取り入れた、新しい教育の推進

○ICTを活用した講義の有効性

- ・東進ハイスクールでも例があるが、林先生の講義などは受験生から圧倒的な支持を受けていて、このようなニーズを持つ者にとってはICTを活用した講義などは効果的である。

○ICTとリアルの双方が必要

- ・教員研修などについてもICTを活用した研修に併せて、実際の集合研修を行い、他の優良例を聞かせて刺激を与えることも有効なので、双方を合わせて行うことが効果的である。

(3) 世界に挑戦できる人材を育てる国際教育の推進について

○英語教育と他教科との融合により言語運用を高める

- ・言語運用力を高めるには、国語や他教科の中で日本語を使って、ディスカッション、ディベートなどを行うことが必要である。そのうえで、英語教育を行うべきである。

○テレビ会議や外国人専任講師の活用が有効

- ・英語の教育では、現地の高校生とのテレビ会議や外国人専任講師による海外の教養テキストの読解なども効果的なので活用するとよい。

現場教員との意見交換の要旨

○「ていねいな教育」

小学校

- ・地域のゲストティーチャーを招聘し、15時間程度総合的な学習の時間を利用して、英語教育を実施している。
- ・担任教諭がALTも活用して週に一度の外国語活動を実施して、生の英語に触れる機会を設定している。

中学校

- ・生徒による授業評価を行い、教科担任の授業が「楽しく学べたか」「分かりやすい授業だったか」などを、4段階で評価し授業改善に役立てている。
- ・英語では、基礎1、応用2の割合でコース分けをし、基礎は単語の意味や発音の仕方、応用は自分の意見や考えを英作文で表現するなど、習熟の程度に応じて授業展開しておりそれぞれのコースを受講している生徒からの評判もよい。

○「きたえる教育」

中学校

- ・数学では、授業で取り扱わない教科書の発展的な問題を課題としたり、英語では、英作文等の課題をALTとともに解いたりしている。
- ・数学は、福井大学の学生の学習支援を活用して、より上位層の子どもたちの意欲向上に繋げている。

高校

- ・公開授業や授業研究会を多く実施している。外部講師を招いたり、自分が授業を見てもらう機会があり、事後に指導を受けて大変勉強になった。異動してきて1年目だが、若い教員が多く、元気のよい学校であると感じている。教師集団の意識を変えることで、生徒も変わっていくと思う。

- ・本校には、国語の授業名人がいて授業を毎時間撮影している。(DVD配付)撮影は、国語の教員が交代で担当しているので、週に少なくとも1回は直接授業名人の授業を見ることができ、たいへん役に立っている。また、全校で公開授業も積極的に行っている。
- ・工業高校に勤務しているが、生徒はまじめで落ち着いており、学習の面で、資格取得や将来の進路志望の実現に向けて、基礎基本の定着を中心に、時間をかけて指導している。
- ・最近、精神的に弱い生徒が増えていると感じる。そういう生徒は、失敗経験が少ないことなどが原因として考えられるので、試練を与えつつ寄り添った指導を心がけている。

○「教員研修」

- ・業務遂行などに関して、民間企業の手法を学ぶ機会があるとよい。民間では残業をしない工夫などもしている。
- ・10年経験者研修における校外研修の職場体験は大変役に立った。さらに高校と特別支援学校で相互に異校種の体験をする研修があるとよい。

○「特別な支援を必要とする教育」

- ・クラスに発達障害と思われる児童・生徒がいるが、発達障害は薬で治るのではなく、周りの理解や対応が大切なので、クラスの生徒に対する指導や保護者との連携を大切にしている。
- ・特別支援学校で重度の重複障害者を担当したが、子どもを観察することや保護者とのコミュニケーションなどの大切さを学んだ。

平成25年11月25日

- 1 子どもの能力を一層伸ばす「きたえる教育」と学習に遅れを生じない「ていねいな教育」の推進
- 2 ICT機能を取り入れた、新しい教育の推進
- 3 世界に挑戦できる人材を育てる国際教育の推進